

# 特別支援学校における一人一人が参加可能な音楽科授業の開発

和歌山大学教育学部：（研究代表）上野 智子 菅 道子

和歌山県立きのかわ支援学校：近藤 親子、糸 ひとみ、下山 由香子、柿本 友惟

## 1. 研究の趣旨と経過

本取組は、大学教員と特別支援学校教員とが連携し、小学部音楽科の授業づくりについて実践的研究を行うことを目的としている。また、今年度は本研究と関連付けながら大阪市立大学との共同研究も実施した。取り組みは下記の通りである。

年月日	概要
2020/11/20	zoom による今年度の授業研究の計画に関する協議
2020/12/8	zoom による授業動画の視聴と協議
2020/12/21	zoom による音楽科授業の事前打ち合わせ
2020/12/22	きのかわ支援学校での音楽科授業の実践（菅、上野、近藤、糸）と協議会
2021/1/26	zoom による音楽科授業の事前打ち合わせ
2021/1/27	きのかわ支援学校での音楽科授業の実践（プレワークショップ）と（菅、上野、近藤）協議会
2021/2/3	紀の川支援学校での zoom を用いた大阪市立大との共同研究によるワークショップ（菅、上野、山崎、沼田、近藤）と協議会

取り組みの具体については、以下に示す。

## 2. 第1学年の児童を対象にした音楽科の授業づくり

### 2-1. 授業動画の視聴と協議から

きのかわ支援学校の音楽科授業は低学年（1・2・3年）と高学年（4・5・6）の2集団で行われている。近藤先生らが担当するのは低学年、26名である。

12/8の協議では、日程調整の関係から1年生A・B組の計11名を対象に、大学教員と特別支援学校教員が合同で音楽科授業を考案・実施することになった。音楽科の授業動画の視聴の協議を踏まえ、前回の学習活動をベースに器楽活動《赤鼻のトナカイ》（J.マークス作曲、新田宣夫訳詞）と身体活動《かみなりどんがやってきた》（鈴木翼作曲、熊木たかひと作詞）の内容を改変した音楽科指導案を考案した。

器楽活動《赤鼻のトナカイ》では次の3点を変更した。1点目は、器楽活動におけるリズムパターンについてである。器楽活動では、「サンタ（♪♪♪）」「そり（♪♪♪）」の2種類のリズムパターンを、1・2年生と3年生の2グループに割り当て演奏していた。しかし、

「そり」が打ちにくそうであったことから別の言葉を探すこととなり、後述する楽器の選択からフラッグ鈴にちなんで「シャン、シャン」にした。

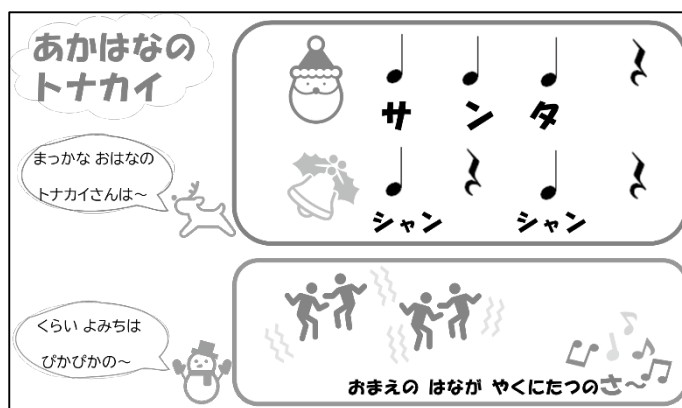
2 点目は、リズムパターンに対応した楽器の選定である。同器楽活動では、学年・クラスごとに指定された 6 種類の楽器を用いた合奏が行われていたが、音色が似ている楽器は自分の担当するリズムを認識しにくいようにみえた。そこで音色が似ていないこと、1 年生でも演奏しやすい楽器として、タンバリンとフラッグ鈴の 2 種類を使用することにした。

3 点目は、曲の構成に合わせて活動を変えることである。《赤鼻のトナカイ》には A（♪真っ赤なお鼻の～）と B（♪暗い夜道は～）の 2 つの場面がある。A では 2 種類のリズムパターンを、B は好きなように鳴らし、最後の「♪役に立つのさ～」でタメをつくるようにした（右図参照）。

次に身体活動《かみなりどんがやってきた

た》では、ギャザリングドラムによるオスティナートを加えるとともに、隠す部分を言った後にヴィブラスラップを鳴らすようにした。

また、活動同士に繋がりができるように、ストーリー性をもたせるようにした（サンタさんが来てくれるように歌を歌おう《赤鼻のトナカイ》⇒サンタさんかと思ったらかみなりどんがきちゃった！《かみなりどんがやってきた》⇒かみなりどんが雨を降らせたせいでサンタさんの服が濡れちゃったから洗濯してあげよう《ぐるぐるせんたくき》）。



## 2-2. 授業の実際

子どもたちは、おおむね落ち着いて授業に参加することができた。《赤鼻のトナカイ》では、みんなで一緒に鳴らすことのできるフラッグ鈴が演奏し易そうであった。一方、タンバリンは、子どもによっては大きすぎるため操作が難しく、またフラッグ鈴のよ



写真：フラッグ鈴

うに他者の動きを感じ取ることができないことから、フラッグ鈴ほど揃った演奏にはならなかった。しかし、B の場面のタメでは殆どの子どもが集中して参加でき、緊張と開放を感じている様子がみられた。

また、《かみなりどんがやってきた》では、ギャザリングドラムが入ることでノリが良くなり、子どもたちも楽しそうに活動に参加していた。そして、隠す体の部位を示す場面でヴィブラスラップを鳴らすことは、明確に場面を切り替えることにつながり、活動にメリハリがついた。また、ギャザリングドラムをたたいたり、ヴィブラスラップを鳴らした

りすることは、活動を支えたりリードする役割を担うため、子どもたちの中には恥ずかしがったり少し緊張する様子が見られるも、一生懸命取り組んでいた。

### 3. zoom を用いた即興音楽活動の実施

#### 3-1. 音楽科授業における即興音楽活動の実施に向けて

今年度は、本共同研究の活動を大阪市立大学の沼田里衣氏との共同研究（文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」2020年度連携型共同研究事業）と結び付けて行うことにした。

沼田氏との共同研究は今年で4年目を迎え、これまでに絵を音や体で即興的に表現するワークショップを様々な場で行ってきた。しかし、きのかわ支援学校の子どもたちは勿論、先生方もこうした即興表現に馴染みがなく、また音楽科の授業時間に本実践を実施させていただくことから、子どもたちの普段の学びや生活と関連付けながら行えるものとして、12/22の授業で子どもたちが楽しそうに取り組んでいた《かみなりどんがやってきた》をテーマに、活動を考案することにした。

#### 3-2. 音楽科授業における即興音楽活動の実際①（プレワークショップ）

1/27に行ったプレワークショップでは、子どもたちが「かみなりどん」になり、《かみなりどんがやってきた》をテーマ曲として、子ども自身が選んだ楽器で即興演奏してもらうという活動を行った。そのために、「かみなりどん」の住んでいるところや雷の様子が具体的にイメージできるよう、動画のお話「かみなりどんのたんじょうパーティー」を視聴してもらい、その後かみなりどんの世界をクラスごとに模造紙に描いてもらった（スズランテープなどを貼る作業も含む）。

「かみなりどんの世界の絵」はとても素敵なものができたが、即興演奏については課題として次の3点が挙げられた。

1 点目は、活動全体を貫くストーリーがなかったことである。「かみなりどんになって好きな楽器で演奏する」という大きなテーマはあったものの、何のために演奏するのかといった物語性に欠けていた。また、本時間は zoom を用いたワークショップのために、子どもたちに絵を描いてもらい、即興演奏に慣れてもらうという意図もあった。しかし、これらがどう関連付けられて1つの活動になるのかについては十分に練られていなかった。

2 点目は、楽器が十分に選定されていなかったことである。本活動では、見たことのない楽器を沢山用意した。休み時間に触れて遊んでもらうなどしたが、子どもたちに楽器を選択してもらう場面では、長い時間迷ってしまうことが多々あった。

3 点目は、活動に集中できるような環境設定や、音響環境を整えられなかったことである。本実践は音楽室が使用できなかったため、1年生の2教室を繋げて使用した。子どもたちの並び方も横1列だったこと、また室内で音が十分に響かないことからキーボードやバスブロックバーの音が聴こえず、子どもの即興演奏を支える音が十分に機能しなかった。



こどもたちによる「かみなりどんの世界の絵」

### 3-3. 音楽科授業における即興音楽活動の実践②（zoom を用いたワークショップ）

2/3 に行った zoom を用いたワークショップは、2 時限分で構成され、最初の 1 時限は和歌山（上野、菅、山崎、近藤）が主導の活動、次の 1 時限は大阪市大（沼田、おとあそび工房）が主導の活動であった。プレワークショップで得た課題を解決するための工夫として次の 4 点が挙げられる。

1 点目は明確なストーリーをつくったことである。本活動は、2021 年は 2/2 が節分なのに 2/3 が節分と勘違いして家に帰れなくなったコオニ（小鬼）を助けるために、子どもたちや沼田氏たち（おとあそび工房）が「〇〇なおんがく」を即興演奏し、家に続く道を作ってコオニをおうちに帰してあげる（鬼は自分の家に帰る時に音楽で道をつくる、という設定）という物語を軸に進めた。これにより、プレワークショップの時よりも、子どもたちは集中して活動に参加できていた。また、沼田氏たち（おとあそび工房）による即興表現は、zoom を通じて大型テレビに映し出され、その素敵で不思議な音や動きに子どもたちや教員は見入って（聴き入って）いた。

2 点目は、明確なテーマを絵カードで示すとともにテーマに対応した楽器群を用意したことである。本活動では「たのしいおんがく」「かわいいおんがく」「げんきなおんがく」の 3 つの音楽のテーマを絵カードに示した。そして、各テーマ対応した楽器群から楽器を選択してもらうようにした。これにより、子どもが迷う場面も殆どなかった。そのため、即興演奏も落ち着いて行う事ができ、個々の子どもについてくださっていた教員も子どもが楽しそう表現する姿に嬉しそうな様子をみせていた。

3 点目は、曲調が対照的な《かみなりどんがやってきた》と《まめまき》を用いることで活動にメリハリをつけたことである。子どもが即興する前には《かみなりどんがやってきた》を、即興によって音の道ができる場面の前に《まめまき》を用いることで明確な場面転換ができた。また、《まめまき》は既習曲ではないそうだが、繰り返すうちに子どもたちや教員が口ずさむ様子もみられた。

4 点目は、キーボードも前回よりも大型のものを用意し、椅子も横並びではなく半円になるように座ってもらったことである。これについては、教室自体の音響の問題があり、キーボードの音量の問題などは完全に解決できたわけではないが、プレワークショップ時よりかは改善された。しかし、参加者が入りきらない、音が聴こえなくなってしまう（勝手にいくつかの音が遮断されてしまう）といったウェブカメラやマイクの設定および性能の問題、カメラや音響を担当する人材の必要性など、遠隔による音楽活動を充実させるためには多くの課題があることが明らかになった。

なお、次の時間の沼田氏たち（おとあそび工房）によるワークショップでは、はじめに子どもたちが描いた 2 枚のうち 1 枚の「かみなりどんの世界の絵」がとても素敵な音楽（即

興表現) になって披露された他、おとあそび工房のメンバーが描いて和歌山に送ってくれた絵を子どもたちが即興で演奏するという試みも行われた。最後に、子どもたちが描いたもう 1 枚の「かみなりどんの世界の絵」を演奏し、子どもたちも途中から(画面の指揮者が絵楽譜の雷雲を指したら)即興演奏に参加し、リモートでの音楽活動の新しい形を見せていただいた。

即興表現のワークショップに参加してくださった教員の感想としては、「リモートでの交流には児童たちも興味を持って見たり聴いたりできていた」、「教材はたくさんあったが、コンセプトをカードで明示したり、布で直前まで隠したりの工夫で注意がそれることなく学習に向き合えた」、「自分自身、2 回目の授業だったので見通しを持って臨めたし、児童の支援もできた」、「2 回目ということもあり、楽器により興味を持ち取り組めていた」などがあった。リモートでの活動を子どもたちも楽しめた様子であったこと、概ね適切な形で支援ができたこと、そして何より今まで馴染みの薄かった即興表現に少しずつ慣れてきてくださっていたことは嬉しいことであった。

#### 4. まとめ

今年度は、音楽科の授業づくりと即興表現のワークショップの 2 本で共同研究を進めた。ワークショップの感想としてきのかわ支援学校の担当教諭からは「活動している円の中から抜け出してしまい、教室の隅で座っている児童を認め、その姿が他の児童に見えなくとも、優しく話しかけながらチャスチャスの音を鳴らすのを待ち、他の児童にも耳を傾けるよう促がす場面があった」ことを取りあげ、「通常の授業では中々できないこと」とのコメントがあった。子どもたちは、音楽科の授業においても即興表現のワークショップにおいても、その子どもなりの参加をしている。その多様なあり方を「承認」し、「寄り添う」という立場を重視するのは音楽療法の考え方であり、その理念を音楽科授業においても取り入れることの可能性を検討することが研究課題の一つでもあった。授業後の振り返りではこの場面を通して協議を深めることができた。本共同研究のテーマである「1 人 1 人が参加可能」とは、誰もが同じようにできるというのではなく、誰もが様々な形で関わることをできるということではないかと考える。今後も現場の先生方との協働の中で、学校の中の音楽の可能性を探っていきたい。